

建学の精神「大覚円成 報恩行持」の由来・来歴をさぐる

— 学園の教育目標（標語）の変遷も踏まえながら —

宮崎 展昌

一、はじめに——本発表の目的と方法——

学校法人総持学園鶴見大学（以下、総持学園は「本学園」、鶴見大学は「本学」と略称）は、建学の精神として「大覚円成 報恩行持」を掲げる。本学公式ホームページによれば、右の二句八字は「本学の創設に深くかかわられた中根環堂先生」が示された⁽¹⁾とされる。また、その由来・来歴については、本学学報では「本学園の創立者であられる故中根環堂先生が、總持寺ご開山鑿山禪師様のご垂示より、学園に学ぶ生徒・学生諸君に教育の理念として示されたお言葉です」⁽²⁾とされている。

けれども、後でも詳しく見るように、「大覚円成 報恩行持」という、それぞれの文言そのままのものは、管見の限り、鑿山禪師が著された典籍などに確認できず、また、漢語仏典の全書的叢書である大蔵経に収められた諸典籍にも、機械検索によって見出すことが難しい。本発表の結論を先取りすれば、本学の建学の精神「大覚円成 報恩行持」という文言は、伝統的な漢語仏典や祖師方の著作・語録などに直接の由来を持つものとは考えにくく（もちろん、後で詳しく見るように、全く無関係というわけではない）、おそらくは、中根環堂先生ご自身が編み出された言葉と推測される。

同時に、戦前、すなわち、学園初期からの教育目標に関わる標語の変遷を整理することや、中根先生の著作物での記述、および、最近利用可能になった国立国会図書館のデジタルツールなどを活用することによって、それらの文言は、中根先生とともに本学園設立に尽力された初代校主新井石禅師からの影響を受けて編み出された可能性が見えてくる。

本発表の概要は次のとおりである。まず、現在も鶴見大学附属中学校・高等学校（以下「附属中高」と略称）より刊行が継続されている機関誌『鶴の林』（戦前・戦中は『つるのはやし』あるいは『鶴之林』。以下、便宜的に『鶴の林』と表記を統一）に記載されていた、学園の教育目標に関わる標語について、戦前より中根先生が在籍されていた頃までを中心に、どのように変遷してきたのかを整理する。あわせて、戦前の二大眼目が戦後もわずかに言葉を変えて「垂訓」として維持された背景について、それにまつわるエピソードを紹介することをおして検討する（第二節）。次に、第三節では、「大覚円成 報恩行持」という両句それぞれに関して、デジタルツールも活用しながら、それらの由来・来歴を探る。ここでは、右の両句が、伝統的な仏典類には見出し難いものに対して、新井石禅師の著作中に見出しうることを報告する。最後に、それまでの検討を踏まえて本発表の結論をまとめる（第四節）。

なお、発表者はこれまで仏教学を専門としてきたので、本発表に関わる調査も、その主たる方法論である文献学的方法をもって行った。すなわち、基本的には、右に示したように、『鶴の林』や仏典、著作などの文献のかたちで残されたものを主たる調査対象とした。よって、かつての在職者や卒業生らへの聞き取りやインタビューなどの調査方法はとっていないので、そうした方法によった場合とは結論が異なる可能性があることを予め断っておきたい。けれども、これまでの文献・雑誌などに記されたことにもとづいて、本発表をまとめておく意義は少なからずあると思う。また、過去の『鶴の林』の調査にご協力いただいた附属中高には衷心より感謝を申し上げたい。

二、『鶴の林』などに掲載された教育目標に関する標語類の変遷

——中根環堂初代学園長在職期間を中心に

学園機関誌である『鶴の林』は、創刊以来、絶えず刊行されつづけてきたものではなく、戦中・戦後は一時休刊を余儀なくされた時期もある⁽³⁾。また、発表者は、創刊号より刊行済の巻号すべてを参照できているわけではない。けれども、本学や附属中高に保管されている参照可能な巻号をもとに調査したものを以下にまとめる。

(1) 戦前・戦中の教育目標に関する標語類の変遷

戦前・戦中の『つるのはやし』あるいは『鶴の林』は、基本的には年末あるいは年度末に刊行する年刊誌であったようである。発表者が参照し得たもので、教育目標などに関する標語類の掲載が確認できたものは、表一にまとめたとおりである⁽⁴⁾。

当初は「二大眼目」とされ、対米戦争が始まったあとの昭和十七（一九四二）年頃からは「垂訓」とされた「恭儉^{きようけん} 修徳^{しゅうとく} 愛敬報恩^{あいけいほうおん}」という二句八字は、後でも見るように、学園を創立なさった新井石禅師より賜ったものである。戦後も、文言をわずかに変えながらも、中根先生在世のところまでは、同じく「垂訓」として維持される。

また、当初「四大標語」とされ、のちに「五大標語」に拡充、やがて「校訓」とされたものは、中根先生によって考案されたものである⁽⁵⁾。戦後は、条項を増やし、文言も変更して、「八大綱領」へと改められた。一方、昭和十三（一九三八）年頃には実質的に提唱されて、後に「日訓」となった「朝は希望におきて礼拝・昼は愉快に働いて報恩・夜は感謝に臥して安心」もまた、「一般的訓育の方法」として中根先生が考案した標語である⁽⁶⁾。戦後も、中根先生の在職中までは、同じく「日訓」として維持されたようである。

刊行年	題目	内容	発表者による注記
昭和8 (1933) 年 (創立10周年)	二大眼目	恭儉修徳 愛敬報恩	
	四大標語	仕事の運動化・所言の実行化・天資の達成化・信念の確立化	
昭和10 (1935) 年	二大眼目	恭儉修徳 愛敬報恩	
	五大標語	仕事の運動化・所言の実行化・天資の達成化・信念の確立化・生活の簡素化	「生活の簡素化」が付加
昭和13 (1938) 年 創立15周年記念誌 (創立十五年史を含む)	二大眼目	恭儉修徳 愛敬報恩	
	五大標語	仕事の運動化・所言の実行化・天資の達成化・生活の簡素化・信念の確立化	順序の変化
昭和17 (1942) 年 (前年末に対米開戦、 表紙には皇紀表記も)	垂訓	恭儉修徳 愛敬報恩	「二大眼目」が「垂訓」に
	聖訓	徳器成就 皇運扶翼	「教育勅語」からの抜粋
	校訓	信念の確立化・天資の達成化・所言の実行化・仕事の運動化・生活の簡素化	「五大標語」が「校訓」に、再度、順序の変化
	日訓	朝は希望におきて礼拝・昼は愉快に働いて報恩・夜は感謝に臥して安心	
	学校標語	一糸も捨てるな興亜の基(資源愛護)・仕事で鍛えよ銃後の身体(鍛錬)・拝む心で互ひに敬礼(礼儀)・心のすきから光がもれる(防空)	
昭和18 (1943) 年 (創立30周年)	垂訓・聖訓・日訓	(同上、省略)	「校訓」はなし
	学校標語	小さな親切大きな力・今年こそ己に勝って敵にも勝抜け	

表1 戦前～戦中における教育目標の変遷

対米開戦(昭和十六(一九四二)年十二月)以降は、明らかに軍国主義が色濃くなり、『鶴之林』の表紙には「皇紀」年号が印刷されるようになり、教育勅語より抜粋した「聖訓」も制定される。さらには「学校標語」では、戦時下の備え・心構えが示されている。くわえて、昭和十八(一九四三)年三月発行号『鶴之林』巻頭の学園近影には、中根先生が国民服を着用し、敬礼する姿が掲載されているのは象徴的である。

(2)戦後の教育目標に関する標語類の変遷

戦争末期から戦後しばらく、学園機関誌『鶴之林』は休刊を余儀なくされたようだが、昭和二十二年(一九四七)度よりタブロイド版として復刊され、昭和二十四(一九四九)年度・創立二十五周年を機に、月刊誌となった。年末ごろあるいは年度末に刊行される『鶴之林』臨時増刊号や、随時発行される『学校要覧』には、教育目標に関する標語類がまとめて掲載される場合が多かったよう

ある。それらについて、中根先生が逝去されて、二代目学園長の三沢智雄先生が就任される前後の昭和三十八（一九六三）年度頃までの変遷について整理したのが表二である。あわせて、昭和四十（一九六五）年刊行の『總持寺誌』や、昭和五十（一九七五）年刊行の總持学園創立五十周年記念誌『古教照心』、昭和五十九（一九八四）年刊行の創立六十周年記念誌『人々悉道器』に記載されている事柄も収録した。

まず、現在の建学の精神である「大覚円成 報恩行持」は、当初「大眼目」とされ、やがて「誓旨」とされる。中根先生没後には、他の標語類が『鶴の林』冒頭に掲げられなくなっても、その両句はしばらく掲載されている。しかし、昭和四十（一九六五）年三月刊行の『鶴の林』では、ついに「大覚円成 報恩行持」の字句さえも掲載されていない。一方、記念誌等によれば、他の教育目標も含めて維持されていたことが窺えるものの、中根先生の逝去の前と後とでは、『鶴の林』に掲げられる教育目標の項目が大きく変化したことは否めない。⁷⁾

次に、戦前、「四大標語」あるいは「五大標語」「校訓」とされたものは、新たに「八大綱領」とされて、昭和三十（一九五五）年度ぐらゐまでは維持されたようである。昭和三十一（一九五六）年度ごろには「四大信条」あるいは「信条」とされたのち、創立五十周年記念誌『古教照心』のころには、「三大綱領」に改められている。⁸⁾

戦前にも「日訓」とされていた「朝は希望におきて礼拝・昼は愉快に働いて報恩・夜は感謝に臥して安心」という標語は、昭和二十四（一九四九）年三月刊行『創立二十五周年記念誌』には見えないものの、昭和二十六（一九五二）年一月刊行の『学校要覧』以降、継続して見え、戦後も維持されていたことがわかる。また、昭和三十（一九五五）年三月刊行の『鶴の林』にある「宗教行事」という記事にもあるように、「日訓」を和歌、うたとしたものも、この頃から用いられていたようである。創立五十周年記念誌および創立六十周年記念誌にも、「日訓」とともに和歌が掲載されており、ともに長く用いられていたことが窺える。

刊行年	題 目	内 容	備 考
昭和24 (1949) 年3月 創立25周年記念誌	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	八大綱領	大和の顕成化・自主の尊重化・知見の 世界化・天資の達成化・信念の確立 化・仕事の聖行化・生活の創意化・報 恩の社会化	戦前の「五大標語」あ るいは「校訓」をアレ ンジしたもの
昭和26 (1951) 年1月 学校要覧	八大綱領	(同上、省略)	
	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	日訓	朝は希望におきて礼拝・昼は愉快に働 いて報恩・夜は感謝に臥して安心	
	垂訓	恭儉 信義 愛敬 報恩	戦前の「垂訓」よりわ ずかに変化、このとき のみ、2字4句
昭和26 (1951) 年2月	二大眼目	大覚円成 報恩行持	「八大綱領」は掲載され ず
	日訓	(同上、省略)	
	垂訓	恭儉信義 愛敬報恩	4字2句(以後継続)
昭和27 (1952) 年12月	八大綱領	(同上、省略)	
昭和28 (1953) 年10月 学校要覧(沿革も掲載)	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	日訓	(同上、省略)	
昭和28 (1953) 年12月 創立30周年記念誌	垂訓	恭儉信義 愛敬報恩	
	垂訓	恭儉信義 愛敬報恩	
昭和30 (1955) 年3月	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	日訓・八大綱領	(同上、省略)	
	(日訓を和歌とし たもの)	あしたには のぞみにおきて みほと けの みめぐみおあぎ ころしずめ ん いちにちを たのしくつとめ も のみな の めぐみのおんに むくい はげまん ゆうべには みのさちおも いはらからの さかえいのりて なご みやすまん	「宗教行事」としてまと められた部分に掲載
	垂訓	恭儉信義 愛敬報恩	
昭和32 (1957) 年1月 学校要覧 昭和32 (1957) 年3月	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	日訓	(同上、省略)	
	四大信条	資性を伸ばし学問に励みましょう 仕事を愛し体力を養いましょう 報恩を忘れず社会に尽くしましょう 信念を堅くし生存を喜びましょう	新たに制定、「八大綱 領」をアレンジしたも の
昭和33 (1958) 年「夏 の日誌」	誓旨	大覚円成 報恩行持	「二大眼目」が「誓旨」 とされる。「垂訓」は掲 載されていない。
	日訓	(同上、省略)	
	信条	(四大信条と同じ、省略)	

表2 戦後における教育目標に関する標語類の変遷 (1)

建学の精神「大覚円成 報恩行持」の由来・来歴をさぐる

刊行年	題目	内容	備考
昭和35(1960)年3月 前年11月、創立 35周年記念式典 培上にて中根先 生が急逝	信条	(同上、省略)	これまで「垂訓」とさ れていたものが「二大 眼目」とされる (この巻号のみ)
	誓旨	大覚円成 報恩行持	
	二大眼目	恭儉信義 愛敬報恩	
	日訓	(同上、省略)	
昭和37(1962)年11月 昭和38(1963)年11月 創立40周年記念 (=大学開学へ)	(誓旨)	大覚円成 報恩行持	巻頭に孤峰智璨禅師の 揮毫、他の標語は掲載 されず、「誓旨」のみ
昭和40(1965)年3月 『總持寺誌』	誓旨	大覚円成 報恩行持	
	日訓	(同上、省略)	
	信条	(同上、省略)	
昭和50(1975)年10月 創立50周年記念誌 「古教照心」	二大行願	大覚円成 報恩行持	
	三大綱領	学問に勉め、個性を伸ばしましょう 体力を鍛え、勤労に励みましょう 信念を養い、報恩に尽くしましょう	(戦前の)五大教育目標 →(戦後の)八大綱領→ 四大目標(信条)という 整理がなされる
	日訓と和歌	(同上、省略)	
昭和59(1984)年10月 創立60周年記念誌 『人々悉道器』	二大眼目	大覚円成 報恩行持	
	八大綱領	(同上、かつての標語の説明)	
	日訓と和歌	(同上、省略)	
	校訓	黙然正坐して 自己に目立めよう 一点に成り切って 心身を煉磨しよう 報恩行持して 人格を完成しよう	

表3 戦後の教育目標に関する標語類の変遷(2)

戦前の「二大眼目」もしくは「垂訓」とされた「恭儉修徳 愛敬報恩」は、少しだけ文言が変更されて、「恭儉信義 愛敬報恩」として、中根先生逝去直後の昭和三十四(一九五九)年度末ごろまで『鶴の林』などに継続して掲載されている。文言が変更された背景は詳らかではないものの、戦前の「垂訓」が、戦後もしばらく維持されたことについては、次項で紹介するエピソードからも、中根先生がこの文言に対する思い入れがあったことが推察できる。

(3)垂訓「恭儉修徳 愛敬報恩」をめぐるエピソード——新井禪師お見舞いのための強行軍に関連するもの

戦前の二大眼目であり、戦後の垂訓のもとになった「恭儉修徳 愛敬報恩」という両句は、随所でも触れられているように、初代校主であった新井石禪禪師より賜ったものである。⁽⁹⁾ それに関連したエピソードとして、昭和二（一九二八）年十月になされた、新井禪師お見舞いのために鎌倉のご滞在先までの強行軍に関するものを、中根先生自身が記した文章によって紹介する。それによって、垂訓ならびに新井禪師に対して、中根先生が強い思い、思慕の念を抱いていたことを確かめたい。

これまでにまとめられた学園史などにもあるように、昭和二（一九二八）年十月八日、病氣療養中で鎌倉に滞在されていた新井禪師の病氣平癒祈願として、職員・生徒らが順々に書写した紺地金泥観音経一巻を禪師に奉呈するために、中根先生が女学生たちを率いるかたちで鎌倉まで徒歩で向かった。その途上、金沢あたりから荒天に見舞われるものの、何とか、鎌倉の新井禪師へのお見舞いを済ませ、荒天によってずぶ濡れになったにもかかわらず、その帰路において、二大眼目を生徒らとともに唱和することによって観音の靈験にあずかり、翌日には生徒が誰一人かけることなく登校したということが、中根環堂『観音の靈験』（昭和十五（一九四〇）年、有光社）の中で詳細に記されている。以下、その一部を引用する。

生徒は夢中になって「恭儉修徳、愛敬報恩」をくりかえして唱へた。「恭儉修徳、愛敬報恩」とは新井禪師が鶴見女学校へ書いて與へられたもので、今では學校の精神となつてゐる言葉である。

プラットホームでも亦汽車に乗つてからも、繰りかえし繰りかえし「恭儉修徳、愛敬報恩」と高唱した。⁽¹⁰⁾

右の引用文より前の箇所では、鶴見高等女学校を設立され、校主をつとめられた「新井禪師は學校にもよくお見え



黙念（大正十四年）

図1 写真に記録された新井石禅師直筆と思しき「恭儉修徳 愛敬報恩」の扁額
（『講堂落成 創立十五周年記念誌』（昭和13年10月刊行）より）

になつて、講堂にてお話しをして下され、生徒に愛されたので、心の融和が出来、生徒達と禅師は親子同様の關係が密接になり、生徒は禅師を親のように親しみ、尊敬するようになった^①ことが記されている。

右のような中根先生の著作での記述や、女学生らとともに徒歩で鎌倉までお見舞いに向かったことから分かるように、学園を設立なさった新井禅師、および禅師より賜った二大眼目に対し、中根先生は思い入れがあったことは想像に難くない。戦後、新たな二大眼目として「大覚円成 報恩行持」を掲げつつも、戦前の二大眼目をわずかに変更して、「恭儉信義 愛敬報恩」を「垂訓」として維持したのは、そうしたことが背景になつたと考えられる。ただし、繰り返しだが、戦後に文言が変更された背景・事情に関しては筆者には明らかにできていない^②。

三、「大覚円成 報恩行持」の由来・来歴をさぐる——デジタルツールも活用しながら

本節では、本学の建学の精神とされている「大覚円成 報恩行持」という言葉の由来・来歴を探る。

まず、この二句八字の言葉は中根環堂先生によって編み出されたものであることが、三沢智雄「智慧と愛情」〔鶴の林〕昭和三千七（一九六二年十一月刊行号）で言及されているので、それを紹介しておく。管見の限りでは、中根先生ご自身が書かれた文章には「大覚円成 報恩行持」の由来・来歴は明示されていないようなので、中根先生のあとを受け、二代目学園長をつとめた三沢先生の文章は最も信憑性が高いと考えられる。すなわち、「智慧と愛情」と題された文章、「今の誓旨」という一節に次のような文言が見える。

さて、こんど再度のご奉公で学校に来てみると、学校では内容外観がいろいろ変わったものがありますが、朝礼で唱える二代標語が誓旨に変わっているのもその一つでした。「いつごろから変わったのですか」と、渡辺潜龍先生に伺うと、「終戦直後、中根先生があみ出して実施しはじめました」とのこと。

三沢智雄先生は、学園を一度離職され、世田谷学園中学校・高等学校の校長などを歴任されたのち、中根先生の急逝を受けて、招請されて二代目学園長に就任された。戦前の二代標語について、三沢先生は「創立当時に新井禪師からいただいたもので、禪師直筆の同じことばの額もいっしょにいただいて」いたことが右の引用文の直前でも触れられている⁽¹⁴⁾。ちなみに、引用文中で言及されている渡辺潜龍先生は、中根先生が急逝された折には、学園長代理を務め、三沢学園長のもとでは教頭などを勤め、のちには中学・高等学校第五代校長にも就任されている。

右の引用から、「大覚円成 報恩行持」という文言は、中根先生が終戦直後に編み出したものであることは確かめら

れたが、次項以降では、さらに踏み込んで、それらの文言が、どのような典籍を典拠とするのか、あるいは、先人たちの言葉に拠ったものか、基ついたものかを探求することを試みたい。

(1) 「報恩行持」ということばの由来の探究

まず、両句のうち、後者「報恩行持」については、よく知られているように、『修証義』第五章の題名「行持報恩」との関連が想起される。明治二十三（一八九〇）年に公布された『修証義』が明らかに先行するので、その影響を受けたことは否定し難い。では、なぜ、そのまま用いずに敢えて文言の順序を変えて、「報恩行持」としたのか、という疑問点が残る。

そこで、「大正新脩大蔵経テキストデータベース(SAT)」(<https://21dzk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)を利用して検索したところ、「報恩行持」(あるいは「行持報恩」という文言は、中国・日本選述典籍を含め、伝統的な漢語仏典にはそのままの語句は見当たらず、それらを出典とする言葉ではないようである。¹⁵⁾

さらに、その検索対象は近代以降の出版物に限られるものの、近年、収録点数の大幅な拡充と機能の拡張が急速に進んでいる「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)の検索機能を活用することで、中根先生が参照し得たであろう、近代以降の出版物などにそのような文言が含まれるかどうかの調査を試みた。¹⁶⁾ その結果、中根先生との関係が深く、学園の創立にも尽力された新井石禅禅師・初代校主の著作や法話録には、主に『修証義』と関連するようなかたちで「報恩の行持」という文言が多数見られ、また、「報恩の行持」と題する法話録も複数残されていることが確かめられる。¹⁷⁾ このことから、新井禅師は「報恩の行持」という事柄、言葉を重視していたと見られる。また、中根先生は「報恩」にもとづく教育の重要性を随所で繰り返し述べて強調しておられるが、それらのなかで、中根先生が触れられている「四恩」については、新井禅師にも「四恩」に関する講演録や叙述がいくつも残されている。¹⁸⁾

右のようなことを総合すれば、戦後に二大眼目のひとつとされた「報恩行持」については、『修証義』第五章のタイトルの影響を受けたことは否定し難いものの、中根先生および学園とも関係の深かった新井禅師からの影響も大きかったのではないかと推察できるように思う。これらのことは、次項にて「大覚円成」という文言の由来について検討する際に併せて考慮する。

(2) 「大覚円成」ということばの由来の探究

次に、「大覚円成」という言葉の由来・来歴について探求するが、この「大覚円成」という言葉は、仏教研究者であれば、仏典のどこかに出典があると予想しうる言葉ではないだろうか。当初、発表者もまたそのように想定していたが、実際に、「大正新脩大藏経テキストデータベース(SAT)」を利用して検索したところ、どうやら、そのような言葉は、中国・日本選述典籍を含む、伝統的な漢語仏典には含まれない文言のようである。⁽²⁰⁾

そこで、先に「報恩行持」について検討したのと同様、この「大覚円成」についても、「国立国会図書館デジタルコレクション」の検索機能を活用して調査したところ、近代以降の出版物での「大覚円成」の用例は決して多くないなかでも、再び、新井石禅師の講演録の中に「大覚円成」の用例が見出された。⁽²¹⁾ 新井禅師と中根先生が全くの無関係あるいは、縁遠い関係であったならば、そこに両者の関連を見出すことは難しい。けれども、先の「報恩行持」についても同様の事象が確認され、この「大覚円成」という言葉もまた新井禅師が用いていたことが確かめられた。よって、戦後に二大眼目とされ、現在は建学の精神とされている両句「大覚円成 報恩行持」は、中根先生が戦後にあみ出しものであるとしても、そこには、新井禅師の著作物などからの何からの影響があった可能性を認めても良いと考える。すなわち、「大覚円成 報恩行持」という両句を二大眼目として選定するに際し、中根先生が独自に編み出した可能性も完全には排除できないが、最新のデジタルツールでの検索結果を踏まえれば、新井禅師が用いていた言葉か

ら選んだ、あるいは、そうしたものから影響を受けていた可能性も想定できるのではないだろうか。

ちなみに、「大覚円成」という言葉は、右のとおり、伝統的な漢語仏典にそのままの字句は見出されず、それらに辞典を求めることは難しい。けれども、その意味するところは「大いなるさとりを完成させる」ということであり、漢訳仏典に類出する「成正等覚」「(現)成正覚」「成正正覚」、サンスクリット語では、(anuttara)samyaksambodhim samyambudhi「この上なく」正しさをとりを得る」というような表現にもとづくもの、あるいは、それらを言い換えたものと見なせるので、決して、伝統的な仏典に見られる表現とは無関係というわけではない。また、道元禅師や瑩山禅師といった祖師方の著作・語録のなかでは、道元禅師の名著『正法眼蔵』『大悟』の巻に見える「大悟現成」という言葉とも類似点を見出しうるであろうか。よって、「大覚円成」ということは、直接的には、伝統的な仏典を出典とはしない言葉であるけれども、むしろ、「さとりの完成」という仏教全般に通じることばであるといえる。

四、まとめ

以上、本発表で整理、検討してきた事柄をまとめると次の通りである。

(1)戦前に「二大眼目」とされていた「恭儉修徳 愛敬報恩」は、新井石禅禅師によって本学園に賜ったものであるが、戦後も、引き続き、「垂訓」として「恭儉信義 愛敬報恩」と少し文言を変更しながらも、中根環堂先生が在職中のころまでは維持された。

(2)戦前の二大眼目「恭儉修徳 愛敬報恩」に対して中根先生が特別な思いを持っていたことは、右の(1)にくわえ、新井禅師お見舞いの鎌倉からの帰路における逸話からも推察できる。

(3)戦後に制定された二大眼目「大覚円成 報恩行持」については、中根環堂先生が編み出したものであることは、二代目学園長三沢智雄先生が残された文章から確かめられる。

(4)ただし、「大覚円成 報恩行持」いずれの文言も、伝統的な漢語仏典を出典としないものの、新井禪師が残した著作物・講演録には、それぞれの文言が確認できた。中根先生は、それら両句を「二大眼目」とするにあたって、何からのかたちで新井禪師からの影響を受けた可能性が窺える。

繰り返しになるが、特に、右の(1)と(2)のことを総合すれば、学園創立時の労苦を共にした新井禪師に対し、中根先生は強い思慕の念を抱いていたと推察され、戦後、中根先生によって編み出されたとされる「大覚円成 報恩行持」の両句それぞれを、新井禪師もまた生前に用いていたことから、その影響を受けたものである可能性が窺える。

戦後、本学園が短期大学および大学を設立したのも、設立当初、新井禪師が掲げられた構想にもとづくことは、『鶴の林』でも触れられており、その示寂後も長きにわたって、新井禪師は、中根先生をはじめとした学園関係者ら、そして学園全体にも影響を及ぼし続けていたといえる。さらに、今回明らかにしたように、現在、「建学の精神」とされている文言にも、間接的なかたちで影響を与えていた可能性が窺える。

最後に、わずかばかりの提言をして、この小論を締めくくりたい。

第一節で、戦前と戦後の教育目標、標語について整理して明らかになったように、中根先生の在職時には、「二大眼目」や「誓旨」とされた「大覚円成 報恩行持」にくわえて、より具体的なかたちでの教育目標および標語を掲げており、また、時代の変化に合わせてか、それらをしばしば変更することもしていたようである(本稿末尾に学園の教育目標に関する変遷について参考までに図としてまとめておいた)。

高等教育機関である大学・短期大学において、事細かな教育目標や標語を掲げることがあまり適当ではないかもしれないが、長年続く、現在の「建学の精神」は堅持しつつも、中根先生が試みられていたように、より具体的なかたちでの教育目標や標語を掲げることが試みても良いかもしれないと、発表者は感じている。例えば、本学の特性上、全学的なものとは難しくても、各学部や学科ごとに、それぞれの特性に合わせたものは設定可能と考える。現代のよう

建学の精神「大覚円成 報恩行持」の由来・来歴をさぐる

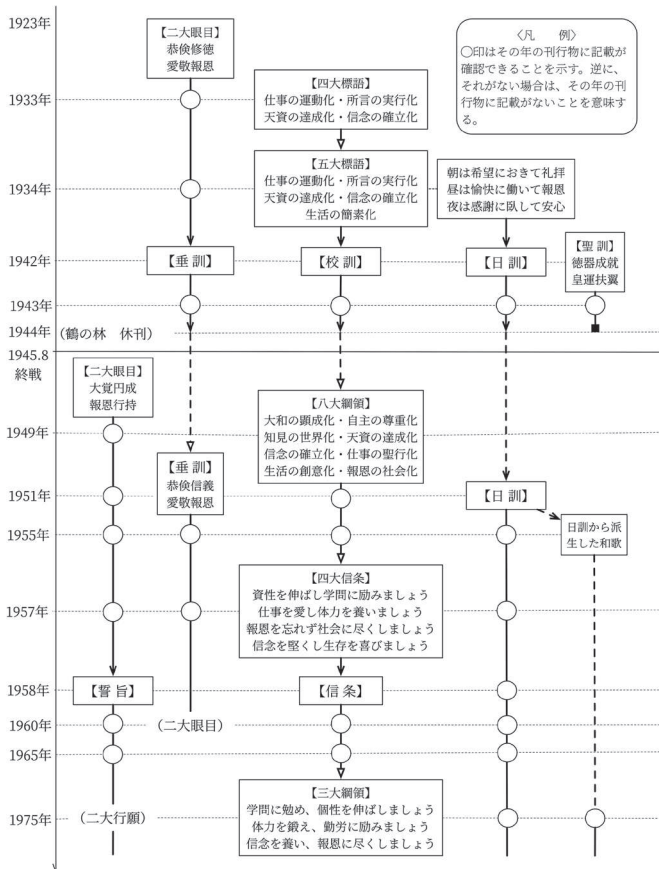


図2 『鶴の林』などに掲載された教育目標に関する標語類の変遷

な変化の激しい時代であればこそ、より具体的ななかたちの教育目標なども掲げること、
「建学の精神」の実現に近づ
くことができるのではないかと考える。一教員に過ぎない発表者は、能力的にも、職掌上も、ここで具体的なものを
掲げることができないので控えるが、「宗教学」という、本学の建学の精神に関わる必修科目を担当する発表者からの
ささやかな提言としたい。

注

- (1) <https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/about/spirit.html> (最終アクセス：令和五年十一月三〇日。なお、以下でも言及するウェブサイトの最終アクセスはいずれも同日であるので割愛する。)
- (2) 例えば、『鶴見大学学報』令和五年度第一号(第四三七号、令和五年四月五日発行)、二頁。基本的に、近年刊行の『鶴見大学学報』では、年度の第一号にて、本学記念館地下二階ホワイエに掲げられている、岩本勝俊禅師揮毫の扁額の写真とともに紹介されることが多いようである。
- (3) 「鶴の林」の歩みをひもとく』、『鶴の林』昭和三十八(一九六三)年十一月刊行号、二六〇～三八頁)参照。特に、三二頁掲載の図は便利である。また、『創立八〇周年記念 未来へはばたけ 夢と希望』(二〇〇四年一〇月刊行)、『創立九〇周年記念感謝を忘れず真人となる』(二〇一四年十一月刊行)、それぞれに収録された「学園年表」にも、『鶴の林』に関する初期の動向は比較的詳細に記されている。
- (4) 橋本弘道先生のご教示によれば、昭和四(一九二九)年刊行の『鶴の林』にも「二大眼目」と「四大標語」が掲載されているようであるが、発表者は実見できなかったので表一には記載していない。
- (5) 中根環堂「創立拾五周年を顧みて 記念講堂新築に及ぶ」(『講堂落成創立十五周年記念誌』、昭和十三(一九三八年)十月刊行)のうち、特に、一六、一七頁参照。
- (6) 同右、一七頁参照。
- (7) 孤峰智璨禅師のもとで得度された三沢智雄先生は、その跡を継いで長野県茅野市の頼岳寺の住職を勤められた(「三沢智雄先生略歴」(『鶴の林』、昭和四十二(一九六七)年十一月刊行号掲載)参照)。学園においては、孤峰禅師と三沢先生は、学園主と学園長として協力して、その運営にあたったと推察できる。孤峰禅師は總持寺貫首在任期間が十一年間と比較的長く、大本山總持寺においては現在の大祖堂が竣工されている(昭和四〇

(一九六五)年)。学園でも、新井禪師・中根環堂先生以来の悲願であった鶴見女子大学設立が遂に成し遂げられた(昭和四一(一九六六)年)。そのような孤峰禪師と三沢先生のもとで、教育目標に関する標語が整理され、戦後に制定された二大眼目へと収斂されていった可能性も考えられるだろうか。ちなみに、孤峰禪師が一九六七年十一月一日に遷化されたあと、三沢先生も同年同月十三日に逝去されている。

(8) 「八大綱領」については、中根環堂「新入生を迎えるの言葉——総持学園訓育の方針」(『鶴の林』、昭和三十(一九五五)年四月発行号)で要綱が示されている。また、中根環堂『民主主義の宗教教育』(宮越太陽堂、一九四七年、国立国会図書館デジタルコレクション)(以下、N D L・D Lと略称) <https://dl.ndl.go.jp/pid/11214931>)では、ほぼ一冊を費やして「八大綱領」の各項について詳しく論じられている。

(9) 本項でも引用する中根環堂『観音の霊験』からの引用文にもあるとおりであり、後でも紹介する、三沢智雄「智慧と愛情」(『鶴の林』、昭和三十七(一九六二)年十一月発行号)でもそのことは触れられている。

(10) 中根環堂『観音の霊験』、二五頁、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1031589/1/18>

(11) 同書、二〇頁、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1031589/1/16>

(12) 中根環堂「我が校に於ける宗教々育」(『教育と宗教』第三卷第十二號、一九三二年)という文章の中で「現在読経も毎朝行つて居ります。始め毎朝恭謙修徳。愛敬報恩。の二句を同音に唱えさせて居たが、思わしからざる所があったので、その後、経を読むことにした」(同、九頁、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1083571/1/6>)とあるのが見える。こういった点が思わしくなかったのは、不明だが、これが戦後文言を変えたことに繋がったのかもしれない。

(13) 中根環堂「現代と報恩思想」(『鶴の林』、昭和二十八(一九五三)年五月刊行号)には、次のような文言が見え、戦後の二大眼目は中根先生自身が編み出したことを示唆しているようにも読める。

そこで私は教育目標たる八大綱領の一つとして『報恩の社会化』をあげ、また、

大 覚 円 成

報 恩 行 持

を教育の二大眼目として居る。

右の文言より、著者の中根先生自身が八大綱領とともに、二大眼目も制定したとみなすことはできるかもしれないが、曖昧さが残る。やはり、引用した三沢先生の文章のように明確なものがあってこそ裏付けられると考えられる。

(14) ただし、その新井禅師より賜った額は、昭和十八（一九四三）年三月に起きた火災によって失われてしまったようである。

(15) なお、S A T二〇一八では、あいまい検索機能を実装しており、それらも試しに利用したが、「報恩行持」あるいは「行持報恩」に類することばで、適当なものは管見のかぎり見あたらなかった。

(16) ただし、「国立国会図書館デジタルコレクション」では、近代以降に本邦で刊行され、日本選述典籍を多数含む「日本大蔵経」や「大日本仏教全書」なども収録し、それらも検索の対象である。ただし、それらの文字データは、OCRによって自動処理されたものであり、それらのみを用いた検索の正確性については問題が残る。（実際発表者も幾らかの誤認識を実見している。）

(17) 『修証義』と関連したかたちでの「報恩の行持」という言葉は、例えば、新井石禅口演『曹洞宗要法話』（鴻盟社、一九〇八年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1083804>) や、新井石禅著『修証義講話』（出版社および版年

不明(大正年間か)、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/906206>)。

また、「報恩の行持」と題された文章・講演録は、新井石禅著『曹洞宗法話大全』(鴻盟社、大正三(一九一四)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/943486>) 四〇五頁以下、大日本雄弁会編『新井石禅師大講演集』(昭和二(一九二七)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1173519>) 二〇六頁以下、神戸修養会編『新井石禅師講話選集』(昭和三(一九二八)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1025017/1.103>) 一七六頁以下、新井石禅著『信は力なり』(京文社書店、昭和六(一九三二)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1211733>) 四五六頁以下などがある。

当然ながら、新井禅師以外の著者による出版物にも、「報恩の行持」という言葉は見える。例えば、加藤咄堂著・大内青巒校『曹洞宗説教大全』(鴻盟社、明治三十五(一九〇二)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/823315>、五二四頁など)がある。

(18) 中根先生が「報恩」を重視していることは、二大眼目に加えて、八大綱領や日訓、あるいは四大信条にも「報恩」の項目が入っていることから窺えるし、『鶴の林』におけるいくつかの巻頭言などからも窺える。また、遺稿でもある『仏教倫理学概論』(鴻盟社、一九六一年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/2977191>)では「報恩の原理」と題する一章が設けられている。

(19) 中根環堂「現代と報恩思想」(『鶴の林』、昭和二十八年五月刊行号)で「四恩」に言及し、他の書籍、中根環堂『処世禅』(宮越太陽堂、昭和十五(一九四〇)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/1685866>) 一六一頁や、中根環堂『父母恩重経』(池田書店、一九五四年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/pid/2977700>) 一四五頁などでも言及されている。

一方、新井禅師は『仏教道德四恩講話』(鴻盟社、大正二(一九一三)年、N D L・D L : <https://dl.ndl.go.jp/>

pid/913585)に代表されるように、随所で四恩に触れていて、注一七で言及した「報恩の行持」と題された文章・講演録においても言及されている。

- (20) なお、「大覚円成」という四字は、様々に解釈できるうる言葉ではあるが、通例では「大覚を円成する」と解釈することが多いだろう。けれども、そのように解釈する場合、漢語としてその字句の自然な並びとしては「円成大覚」とすべきであろう(実際「円成大覚」は、『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌経』(大正蔵一九一、八七二中)に一例のみ見出される)。よって、「大覚円成」という字句は「和製漢語」とも言うべき、日本語的な読み方・解釈を前提とした字句といえ、同語が伝統的な漢語仏典に見いだせないことは宜なるかな、とも言える。
- (21) 新井石禅口演『曹洞宗要法話』(鴻盟社、一九〇八年、NDL・DL: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1083864>)九八頁。ちなみに、「国立国会図書館デジタルコレクション」では、新井禅師の用例含めて、一九四五年より前の出版物では十三例しか見出せず、それほど広く用いられたことばではないことが確かめられる。「大覚を円成」という字句については七件、「大覚の円成」は一件、それぞれ見出されたが、いずれも用例数は限られることに違ふはなす。

ちなみに、国立国会図書館の実験的サービスを提供するNDLラボによる「NDL Ngram Viewer」(<https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/>)での正規検索を利用したところ、近代の出版物において、「大覚円成」に類似した表現として類出するのは「大覚円満」ということばである。「大覚円満」は空海の『秘密蔵法論』の「第三婴童無畏心」に含まれる語句であることから、真言宗系の書籍を中心に多くの用例が確認できる。

- (22) 總持寺を開創された瑩山禅師との関連について言えば、愛知学院大学の横山龍顯先生のご指示によれば、主著『伝光録』は歴代祖師方が悟りをお開きになった因縁・経緯について著述したものであるので、『伝光録』全体の趣旨から言えば、「大覚円成」を説いたものと見ることもできるだろう、ということである。

(23) 例えば、中根環堂「本学園創立三十周年を顧みて 将来の抱負に及ぶ」(『鶴の林』創立三十周年臨時増刊号、昭和二十八(一九五三)年十二月発行)、九頁参照。

(みやざき てんしょう・鶴見大学仏教文化研究所専任研究員(准教授))